

## 〃誕生一二〇年記念

## 小泉信三展〃を開催して

小室正紀  
(慶應義塾福澤研究センター所長)

### 社中協力で成果

五月八日から二日まで、三田キャンパス図書館旧館大会議室にて、小泉信三展が開催された。二週間の開催期間中に、一万二千名を超える方々がお越し下さり、三千部を用意した展覧会図録は完売され、最終日には足りなくなるほどの盛況であった。本展覧会実行委員の一人として、多くの来場者の皆様、さまざまに御支援を下さった塾員諸兄諸姉、図録の作成に商売抜きで御尽力下さった慶應義塾大学出版会の皆様に、心より御礼を申し上げたい。また、貴重な資料を今日に守り伝え、本展覧会のために御提供下さった小泉家をはじめとする関係各位には感謝の言葉もない。

### 開催の経緯

生誕一二〇年を記念し小泉信三展を開

催しようという話が公式に相談され始めたのは、平成十八年三月のことであった。まず西村太良常任理事が、塾内外の関係者に声をかけ相談会が行われ、それが実行委員会に発展したと記憶している。企画推進に当たっては、小泉信三の所属学部であった経済学部と、関係資料を収蔵している福澤研究センターが協力機関となり、事務部門は広報室が担当した。

本展覧会は、このように比較的早くから検討が始まった企画であったが、予算繰りなどさまざまな事情があり、具体的に会期が決定されたのは、昨年十二月であった。展示内容の作成と図録編集は、仕事柄、結局は福澤研究センターが大部分を担うことになったが、この会期の決定は、同センターにとってはかなり厳しいことであった。

同センターは、創立一五〇年記念出版の『慶應義塾史事典』を編集中であり、また来年度から全国四館を巡回する「未来をひらく福澤論吉展」の準備もやっている。また、一五〇年の記念すべき年ということもあり、福澤論吉や慶應義塾史に関して、塾内外から、問い合わせ、筆依頼、正誤チェックの依頼、企画相談、講演依頼、資料の閲覧・貸出依頼、資料提供など、大げさでなく降る星の如く仕事がある。そうした中で、「小泉信三展」のために貴重な戦力を割くことは、ただでさえ多方面作戦を行っている所に、また新たな大作戦正面ができてしまったようなものであった。

### 時代が可能にした展覧会

ところで、私自身は、小泉信三の業績を尊敬するに吝かではないが、それは一人の優れた先人に対するものであり、自分が小泉ファンだとは思わない。あるいは、ファンになることに對して、心のどこかにわだかまりがあると言うべきなのかもしれない。一つには、私が教育を受けた頃の経済学部では、小泉信三の明解すぎる共產主義批判に対しては、ノン・コミュニケーションの間にもながしかアンヴ

イバレントな思いがあった。そんなにも明解で迷いが無くて良いのか、といった屈折した心情があったのだと思う。

また、大戦に関することもあった。私の恩師は、経済学部の手手であった昭和十六年に出征し、北支からインドネシアに転戦し二十二年に復員した。おそらく戦場での過酷な体験と塾長小泉信三の言動との間には、言葉にしがたい違和感があったのだろう。大変に穏やかな方であったが、小泉信三については余り語られず、語る時には言外に批判的なニュアンスがあった。誰があの時代の塾長を務めたとしても、小泉信三以上に出来なかったことは、誰もが分かっていた。それでも割り切れないものが残ったのだろう。今回の小泉展を訪れた七十歳近いある名誉教授が、「よくこういう展覧会が出来たね。二十年前では出来なかった。時代だね。」と言われていたが、それがかつての雰囲気を物語っている。

### 準備過程で感じた小泉信三の力

このような、個人的な視角はあったものの、福澤研究センターの責任者として展覧会の成功のために出来る限りのバックアップを行った。具体的な展示内容の

作成は、これまで関係資料の収集・整理に尽力してきた山内慶太郎（看護医療学部教授）、都倉武之君（福澤研究センター専任講師）、神吉創二君（幼稚舎教諭）の三君が、広報室と協力しながら、ほとんど全てを担ったと言つてよい。わずか四カ月の間に、あれだけの展覧会を準備することは並大抵のことではない。連日、深夜までの作業がつづき、都倉君などは体重が減っていることが傍目からも明らかであった。

しかし、蓄積疲労とは裏腹に、準備の進行とともに三君が、ますます小泉信三に惹きつけられ、のめり込んでいくことも見て取れた。準備過程で発見した新資料について語る時などは、本当に目が輝いていた。

歴史上の人物に関する資料の中には、研究者をとらえて引き込んでゆく力を持つものがある。その人物が、資料を通して迫ってくる生の魅力と言つてもよい。三君を駆り立てていたものは、そのような小泉信三とその資料の力であったような気がする。

### 展示を終えて

展示に当たっては、アートセンターの

前田富士男所長の御好意により、一五〇年事業室所属の学芸員である平塚泰三君と福士理君が、展示会社との交渉を含め、全面的に参加協力して下さった。美術館勤務の経験がある両君の適切な指示があったならば、展示会場はあのように見やすく整わなかったに違いない。

そのような展示の準備は、内覧会の前夜遅くまでかかった。飲まず食わずで、最後の仕上げを確認し、後を広報室の渡部淳課長に託して、皆が会場の図書館旧館を出たのは、午前一時に近かったと思う。

私は、関係者として控えているのみであったが、実際に作業を担った方々の専心する姿を見ている内に、あらためて間接的に「小泉信三の魅力」の存在を実感した。開催前夜、作業が終わり、タクシィで自宅に向かいながら、いずれ小泉信三の著作を、きちんと読んでみようと考えた。主催者にとつても、新たな世界を知る意義深い展覧会であった。

